

地方国語教育史の展開 (1)

—『讀方教材の類型的展開と其の指導』(京都市朱雀第六尋常小學校) に見る昭和十三年の一点描—

植山 俊宏

**Development of the History of Local Language Education:
A pointillism of 1938 in "The Typological Development of Teaching Materials and
Their Guidance" (Suzaku No. 6 Elementary School in Kyoto City)**

Toshihiro UYEYAMA

Accepted November 9, 2022

抄録：昭和 13 年刊行の京都市立朱雀第六小学校『讀方教材の類型的展開と其の指導』は、優れた地方国語教育史の好例として見る事ができる。本稿は、同書所収の 21 編の論考のうち、時勢的な反映が見られる 15 編を取り上げ、分析して、従来総論的に評価されてきた同教科書の記述との対比を行い、実践現場における研究成果を分析し、地方国語教育史の水準を検証した。また昭和 12 年に文部省教学局から配布された『国體の本義』の一地方教育現場における浸透の状況の一端も明らかにした。

索引語：地方国語教育史，京都市朱雀第六尋常小學校，国語教材研究，第四期国定小学読本，『国體の本義』

Abstract: The book "Typological Development of Yomikata Teaching Materials and its Instruction," published in 1938 at Suzaku No. 6 Elementary School in Kyoto City, is an excellent example of the history of Japanese language education in the region. This study examines 15 of the 21 essays in the book that reflect its times, analyzes them, and contrasts them with the generalized descriptions to examine the level of education in the local Japanese language history. It also clarified certain aspects of the penetration of "Kokutai no Hongi" (The True Meaning of Kokutai), which was distributed by the Education Bureau of the Ministry of Education in 1937, in local educational settings.

Key Words: History of Local Mandarin Education, Suzaku No. 6 Elementary School in Kyoto City, Study of Mandarin Teaching Materials, Fourth National Elementary School reader, The Origin of the State System

1. 研究の背景・目的・方法

本稿においては、歴史的仮名遣い、送り仮名は言文通りとしたが、原則として書名以外は、旧字体は新字体に変換して引用してある。

(1) 研究の背景・目的

① 研究の背景

国語教育史研究は、飛田隆、石井庄司、野地潤家、飛田多喜雄、望月久貴、滑川道夫、井上敏夫、増淵恒吉、倉沢栄吉らの研究によって研究分野として早くから確立されていた上に、近年の研究も進み、国語教育学研究の中でも大きな領域を占めている。それは、芦田恵之助、垣内松三、秋田喜三郎などの個人研究、国語科の成立・変容、国語教育思潮などの思潮史・制度史研究など活字資料が確保されている分野を中心に進められてきた。当然ながら、教育実践の歴史についても注目されてはきたが、活字資料的には確保が難しいことが指摘されてきた。前者を広く理論史研究と呼ぶとすると、後者は実践史研究ということになる。この両者の研究領域はまさに国語教育学研究の両輪ということになるが、資料確保の点で後れを取りがちな実践史研究の不十分さは問題であり、本質的な問題は一研究分野の立ち遅れではない。理論と実践の両輪の両立が不成立なところが大きな問題である。本来、理論は実践から帰納されたり、演繹的に理想像を示したりするし、実践は理論からの提案を受け、具現化したり、理論の根拠となる実践を示したりする。つまり、両者は、一台の車を一体化する両輪としての位置にある。これが、バランスを崩し、一方だけが過剰に先行したり、重点化されたりすると国語教育学研究自体がいびつな形を呈することになる。^{1) 2) 3) 4) 5) 6) 7) 8) 9) 10) 11) 12)}

② 研究の目的

本研究の第一の目的は、戦前から研究者等からの言及の多い『第四期国定小学国語読本』の教材について、実践現場で行われた教材研究を取り上げ、この理論と実践との関係を考究するものである。

対象とする文献は、京都市朱雀第六尋常小學校が刊行した『讀方教材の類型的展開と其の指導』（昭和十三年二月十五日刊・非売品）である。時期的に『第四期国定小学国語読本』使用の時期に当たる。この教科書は画期的な教科書との評価を受け、国語教育史的に多くの論及が行われている。「児童の心理的発達に即した読本編纂を心がけた」教科書（古田東朔）という評価である。この点が、実践現場にどのように受け止められ、反映されているかを明らかにしたい。この論及を総論ととらえ、同書を一実践現場から発せられた各論・具体論と考えて、両者の見解を検討することにより、教科書研究、教材研究の一体化する両輪の姿をつかむ手がかりが得られると考えることができる。^{13) 14) 15)}

第二の目的は、満州事変後の昭和 13（1938）年当時、急速な国家主義思想の強化が図られているが、それがどのように教育現場で捉えられていたかの一端の解明を図ることである。本書刊行の前年（1937 年）3 月、文部省教学局から『國體の本義』という冊子が配布されている。同書には、以下のような記述が見られる。¹⁶⁾

「我が国の教育も、亦一に国体に基つき、国体の顕現を中心とし、肇国以来の道にその淵源を有すべきことは、学問の場合と全く同様である。＜中略＞我が国の教育は、明治天皇が「教育

ニ関スル勅語」に訓え給うた如く、一に我が国体に則とり、肇国の御精神を奉体して、皇運を扶翼するをその精神とする。従って個人主義教育学の唱へる自我の実現、人格の完成といふが如き、単なる個人の発展完成のみを目的とするものとは、全くその本質を異にする。即ち国家を離れた単なる個人的心意・性能の開発ではなく、我が国の道を体現するところの国民の育成である。個人の創造性の涵養、個性の開発等を事とする教育は、動もすれば個人に偏し個人の恣意に流れ、延いては自由放任の教育に陥り、我が国教育の本質に適はざるものとなり易い。」¹⁷⁾

ここには当時の「我が国の教育」のあるべき姿に関する一般論が記述されている。これが具体的にどのように実践現場に理解され、浸透していたかを捉えることである。「児童の心理的発達に即した読本」であることと、「教育において国家主義の教授・浸透を図る」こととのいわば二律背反的な状況が実践現場でどのように理解され、整合性がつけられたかを見極めることが肝要である。これは、研究課題として非常に大きなものであり、本考察はその課題の一端にたどりつくことをねらいとする。

(2)研究方法

次の手順で整理と分析・考察を進める。以下は、各章題と対応させてある。

1. 研究の背景・目的・方法
2. 国定読本の概略と『第四期国定小学国語読本』
3. 『讀方教材の類型的展開と其の指導』（京都市朱雀第六尋常小学校）の成立状況
『讀方教材の類型的展開と其の指導』は第一部～第三部の計 21 編の論考からなるが、「第二部」「詩歌教材」と「第三部」「表現より見たる分類」は、内容に関してではなく、表現に関する分析が中心なので、今回は対象外とする。なお、①～⑳の番号は、稿者による整理上の付与である。
4. 「第一部 素材より見たる分類」論考 15 編の分析・考察
5. 総括・結論・今後の課題

2. 国定読本と『第四期国定小学国語読本』

(1)戦前期国語教科書（国定読本）の概要と特徴

戦前期の小学校（特に断らない限り尋常小学校を指す）において読み方教育は、ほぼ国定国語読本に従って行われた。その方法は教材の性格によって異なる。文学教材は、情緒の安定や徳目の教授などが目的となっている。神話教材、童話教材、おとぎ話教材、加えて翻案の古典教材などである。それ以外に、理科的教材、公民的教材、歴史的教材があり、現在でいう説明的文章教材の分野に属した。その扱いは、理科、現在でいう社会科の教科的な未整備から、知識的な部分を国語の読み方教材で補完するねらいで使用された。

小学校国定読本は、時期区分として 6 期に分けられて捉えられている。

第 1 期は、明治 36（1903）年の小学校令改正を受け、国定化された国語読本の最初のものである。当時の小学校制度の修学年限が 4 年であったため、各学年上下 2 巻の計 8 巻からなる。冒頭教材が「イエ スシ」であったため、この名が通称となっている。主に訛音の矯正を目的

としており、「イエ」も「スシ」の具体的な事物を享受するというより、正確な発音を習得することが目的とされた。全体として文学教材は少なく、科学的な内容を重視しており、理科学習の代替の目的を担わされるという特徴があった。明治 37 (1904) 年から明治 42 (1909) 年にかけて使用された。

第 2 期は、明治 40 (1907) 年の小学校令改正を受け、小学校修学年限が 6 年間に延長されたことにより、各学年上下 2 巻の計 12 巻の構成となった。内容的に童話、おとぎ話、伝説、神話などの文学教材が増加している。それ以外にも国民的行事、習慣、趣味などが取り入れられており、小学生の発達段階を考慮する方向性が強くなっていることがうかがわれる。冒頭が「ハタ タコ コマ」であったため、「ハタタココマ」読本と通称された。これは、冒頭に国民的行事で親しまれる日の丸の「ハタ」と、遊具である「タコ」「コマ」を置き、教科書に親しませる意図をもったものであるとともに、単純なしりとりを用いており、児童心理に配慮していることが見て取れる。日露戦争後の編纂になったことからいわゆる軍国教材が掲載された。ただし、この事実が国民の大衆演劇志向から生み出されたものであり、文部省側の意図ではなかったことが中内敏夫によって指摘されている。冒頭教材のみがワードメソッドで以降はセンテンスメソッドを採用していた。明治 43 (1910) 年から大正 6 (1917) 年にかけて用いられた。¹⁸⁾

第 3 期は、大正 17 (1918) 年から昭和 7 (1932) の 14 年間使用された。第 2 期と同じく、修業年限 6 年で各学年上下 2 巻の計 12 巻となっており、以降この形式が踏襲される。冒頭が「ハナ ハト マメ マス」であったことにより、通称は「ハナハト」読本であった。実はこの期においては、第 2 期の「ハタタココマ」読本の修正版も併用されたが、採用数は少なかった。児童生活を取り上げたもの、児童が主人公のもの、童話やおとぎ話、外国の紹介の文章、外国人が主人公のものなど多様化が図られ、人気を博した。ただ、さるかにの末尾が「ハサミデハサミキリマシタ」となっているように前近代的な内容も残っていた。

第 4 期が、本書の内容に対応している。「サクラ読本」と通称された小学国語読本である。昭和 8 (1933) 年から昭和 16 (1941) にかけて 9 年間使用された。これについては、詳しく後述する。

第 5 期が、通称「アサヒ読本」と呼ばれた国民学校用の国語教科書である。第一学年が「ヨミカタ」、第二学年が「よみかた」、第三学年以上が「初等科国語」である。冊数は旧来通りで各学年上下 2 分冊、計 12 冊であった。第 5 期教科書は、本稿の考察の対象外となるため、簡略な情報提示にとどめる。

(2)『第四期国定小学国語読本』についての諸論

本書の核をなす「讀方教材」(以下「読本教材」と表記する)は、第四期国定国語教科書『小學国語讀本』所収の讀方教材であった。第四期国定国語教科書は、俗に『サクラ読本』と呼ばれる名著の誉れの高い教科書であった。以下、『教科教育百年史』(建帛社 1985) から該当する箇所を引用する。¹⁹⁾

昭和八年に、国定教科書の全面改訂が行われた。「ハナ ハト マメ マス」から「サイ タ サイ タ サクラガサイタ」「ススメ ススメ ヘイタイススメ」に変わった。いわゆる「サクラ読本」と言われ、古事記、日本書紀の神話や太平記などから引用された史話が多く、国民精神の涵養に力を入れた皇國的な思想が底流をなしていたと言える。この数年後の同

十一年の二・二六事件から日中戦争を経て、太平洋戦争に至る時期に、戦争遂行に必要な教育制度の改革について審議の役割を引き受けたのが、「教育審議会」である。

昭和十二年の審議会発足に際して、文部大臣木戸幸一は、「国体ノ本義ノ徹底」「国民大衆ノ教育ノ拡充」「国民体位ノ向上」「科学及産業教育ノ振興」「真ノ人物ヲ育成シ、創造的実践的性格ヲ鍛錬スル」ことなどが、今後の教育改革に与えられた重要な課題であると述べている。まさに、高度国防国家体制に見合った教育制度改革の意図が示されたと言える。

ここには、『第四期国定小学国語読本』の教材の特徴とともに、時代背景的な政治状況も示されている。教材の特徴としては、「古事記、日本書紀の神話や太平記などから引用された史話が多いこと、それは「国民精神の涵養に力を入れた皇国的な思想が底流をなしていた」ことによることが指摘されている。時代背景として取り上げられている「昭和十二年の審議会発足」は、『第四期国定小学国語読本』の刊行後であるが、ここに述べられている主旨と現場教師たちの教材研究との関係性を見ることによって、後発の制度と実践との関係をとらえることができる。

『日本近代教育史事典』（平凡社 1971）には、当時の時代背景も含めて次のように述べている。²⁰⁾

小学国語読本

昭和八年（一九三三）より使用された。図書局長芝田徹心、発行課長青木存義のもとに佐野保太郎、大岡育三、井上赳、各務虎雄が中心となって編集したもの。大正期より昭和期にかけての新教育運動・児童文学運動の影響を受け、教材はいちじるしく児童の心理と生活に結びつけられる一方、文学的色彩が豊かとなっている。たとえば、従来の単語より文章に入る方法を捨てて、「サイタ サイタ サクラ ガ サイタ」の律動をともなったさけび声より入っている。その反面、知識教材は少なくなっている。また、満州事変後の国家主義的思想を反映し、国民文化より取材したものが多くなっている。教材の文学化にともない文章表現も豊富になり、教科書のページ数も多くなっている。国定読本最初の色ずり本であり、外見、新鮮な感覚を与えるが、内容的にも多くの新しいものを見る。」

教材採択の傾向について、「児童の心理と生活に結びつけられる」こと、「文学的色彩が豊かなこと」、「知識教材は少なくなっている」こと、「国民文化より取材したものが多」いことが挙げられている。国家主義的傾向については、前出の引用と同様の指摘が行われている。

次の記述は、教科の「修正」の視点から、第四期国定教科書の特徴を述べたものである。²¹⁾

（大正七年（一九一八）の修正を受けて：引用者注）次の大修正は満州事変後、各教科にわたって行われ、昭和八年以後次第に使用された。「小学国語読本」・「尋常小学算数」・「尋常小学図画」・「高等小学図画」などと書名も内容も大きく改められた。この時期の修正の特徴は「サイタ サイタ サクラ ガ サイタ」の文章で始まる昭和八年（一九三三）から使用の「小学国語読本」、昭和九年（一九三四）から使用の「尋常小学修身書」、昭和十年から使用の「尋常小学算術」などにみられるように、この期の教科書は明るい色刷りの表紙となり、低学年は色刷りのさし絵も多く、それまでの教科書とはっきり区別される。このように大正期から昭和期にかけての世界的な新教育思想がとり入れられ、児童の生活

と心理を重んじて教育方法上の工夫がみられる。しかし内容的には満州事変以後高まってきた国家主義思想を反映しており、国語・修身・国史・地理などの教科書につき、この点が明らかに認められる。当時は国家主義による国民教育の統制が強力にすすめられ、教学刷新、国体明徴が強調されていて、この立場からの教科書の大修正であったのである。

この記述は、教科書自体の特徴というより、この第四期として行われた教科書の「大修正」については述べられたものである。国語読本のみならず、修身、国史、地理が「国家主義による国民教育の統制が強力にすすめられ、教学刷新、国体明徴が強調され」た結果の修正が行われたとしている。

3. 『讀方教材の類型的展開と其の指導』（京都市朱雀第六尋常小學校）の成立状況

(1) 発行者（執筆者）及び書籍情報

朱雀第六尋常小學校は、昭和 7（1932）年に開校している。「朱櫻研究叢書」と称する連続する研究書を刊行していた。「第一巻」は『讀方教育の原理と方法』であったことが「第二巻」の本書『讀方教材の類型的展開と其の指導』の奥付裏の広告欄から見て取れる。「第一巻」は未確認であるが、通常「第一巻」の刊行なしに「第二巻」の上梓は考えられないので、同校は開校後 6 年にして共著を 2 冊刊行していたことになり、研究意識の高さを見て取ることができる。本稿では、『讀方教材の類型的展開と其の指導』の考察を目的とするので、当時の同校の研究動向の調査、探究は今後の課題としたい。なお、本稿における表記だが、書名以外は、新字体とする。旧仮名遣いはそのまま用いることとする。

本書は、本編 388 ページに、中表紙裏の物故者への献辞 1 ページ、序 3 ページ、目次 2 ページ、奥付 1 ページ、奥付裏の広告 1 ページの計 396 ページからなる大著である。執筆者は、校長以下 21 名である。「序」に「全職員夫々研究事項を分担し、読本教材の類型に則し、総合的体系的なる研究を続けた」とあり、この 21 名が同校の「全職員」であったことが分かる。

(2) 「序」に見る本書の動機

中表紙の次のページに同校の研究に関わった物故者 3 名に対する献辞が記されている。その次に同校校長上原昭平の「序」が 3 ページにわたって続いている。「序」には、小学国語読本巻九の「国語の力」の「我々は、一日たりとも、国語の力をかりずに生活する日はない。我々は国語によつて話したり、考へたり、物事を学んだりして、日本人となるのである。」という一節を取り上げ、国語及び国語教育の重要性を説いている。これは、「国語が歴史と文を孕み、国民精神の母胎としての重要性をよく言ひ表はしてゐるといへよう」に続いていき、この部分には当時の時代状況を反映した言及へとつながっている。だが、次には、「かゝる重要な国語の教育、わけても小学校の読方教育は現状を以てして満足すべきか、巻十迄改訂されたる昭和読本の真使命については、吾等初等教育者は果してよく之を理解して適正なる研究と有効なる指導をなしつつありや。顧みて甚だ忸怩たるものがあるのではなからうか。」と記されている。ここに、時勢、時局的な認識も反映されていると思われるが、基本的には新しい教科書に改訂された

ものの教材研究が不足しているという認識から発しているといえることができる。これは、後続の「乃ち、本校に於ては国語解釈学、読方教育の原理、読方教育の心理及学習指導法などの研究と共に、教材そのものゝ徹底的究明によつて、正確なる認識に基礎づけられたる教壇上の活動に自覚と自信を得ん事を企画」したという記述で証明できる。

本書の成立の動機は、一方に当時の時勢、時局を反映した国語教育観に発した研究の必要性を感じつつ、もう一方で理論先行になっていた当時の国語教育研究に対して、实际的な「教材そのものゝ徹底的究明」の必要性を認識していたことがあげられる。この「究明」により、教師の「教壇上の活動に自覚と自信を得」ることができると考えているといえる。国語教育研究に対する教育現場の真摯な向き合いを見取ることができる。

(3)目次の分析

まず目次（本書の構成）の検討を行う。論考総数は 20 編であり、単著 19 編、共著 1 編となっている。三部構成を取っている。ページ数は 8 ページから 90 ページとなっており、執筆者に対して分量には条件や制限が設けられていなかったと考えられる。1 編あたりの平均は 19.4 ページである。ページは 26 字× 21 行の 2 段組で、1,092 字なので、最少 8,836 字、最多 98,280 字、平均 20,966 字である。分量からだけで判断すると、論考の作成には相当な準備と時間、労力が費やされたと推測される。「序」には、「一項成る毎に会を開いて議論を上下」したとあり、その労力のあり方がうかがわれる。

「第一部 素材より見たる分類」15 編

- ①「国民精神養成の根本たる神話」岡地君子 pp.1-12
- ②「人間性涵養の慈母たる童話寓話教材」加藤綾子 pp.13-26
- ③「史譚教材の一考察」武住英男 pp.27-50
- ④「民族精神の発露たる伝説教材」川那部保 pp.51-62
- ⑤「尽忠報国精神の真諦たる軍事的教材」武智正雄 pp.63-78
- ⑥「人間味を培う一契機としての「わらひ」の教材」小川忠夫 pp.79-92
- ⑦「女子を主人公とする教材」兒玉吉乃 大森光枝 pp.93-108
- ⑧「新読本に現れたる生活教材」室華子 pp.109-120
- ⑨「生活教材に関する一考察」兒玉ます pp.121-130
- ⑩「生活文に見る観照態度」高井政市 pp.131-138
- ⑪「理科的教材と科学的精神」堀巖 pp.139-144
- ⑫「理科的教材に対する私見」砂井源之助 pp.145-162
- ⑬「小学国語読本に現れたる地誌的教材」宮崎助義 pp.163-194
- ⑭「祖国愛の涵養を意図せる読方教材」藤原米治 pp.195-210
- ⑮「小学国語読本の公民的教材」芦田作二 pp.211-234

「第二部 詩歌教材」1 編

- ⑯「純文学としての詩の原理と韻律文及韻文の総合的研究」田村武雄 pp.225-314

「第三部 表現より見たる分類」4 編

- ⑰「文語文に対する考察」阿座上新一 pp.315-350
- ⑱「説明文（附議論文）の考察」山口不三男 PP.351-350

①⑨「叙景文の研究」 芦田静子 pp.363-378

②⑩「書簡文と日記文の考察」 山本文子 pp.379-388

(4)先行研究に見る本書

明治期から昭和戦前期の国語教育の動向を集約した有力な研究書として『国語教育史資料』（全5巻）がある。その『第六巻 年表』は、昭和33（1958）年から昭和55（1980）年まで、国立上野図書館（現国立国会図書館中央館に統合）、国立教育研究所附属図書館（現国立教育政策研究所教育図書館）、東書文庫、学習院大学附属図書館、国立国会図書館の所蔵文献の調査に基づいており、昭和32年までの国語教育関係の出版物が網羅されている（昭和33年以降は『国語年鑑』に該当記事が記載されている）。きわめて信頼度の高い資料集成といえるが、同書には本書に関する記述が見られない。²²⁾

また同じく明治期から昭和戦前期までの主要な国語教育書・国語教育誌を採録した文献に『近代国語教育論体系』（正編16巻、続巻3巻、別巻2巻）があるが、ここにも本書は収録されていない。²³⁾

さらに巻末に明治以降の出版物の年表をもつ『国語教育研究大辞典』の昭和13年の欄にも本書の記載が見られない。²⁴⁾

4.「第一部 素材より見たる分類」論考15編の分析・考察

(1)「第一部 素材より見たる分類」論考15編のテーマ別の再構成

「第一部 素材より見たる分類」は、15編の論考からなり、一定の構成が行われているが、論考名中の用語に着目すると、別の視点からの構成が可能だと思われる。「国民精神、民族精神、報国精神」、「人間性、人間味」、「生活」、「史譚」・「地誌」・「公民」といった社会科（現行）の視点、「理科」、「女子」という登場人物の視点の5つの視点が設けられる。

この5つの視点は、さらに2分類することができる。「国民精神、民族精神、報国精神」、「人間性、人間味」という一種の精神性、心性に根差すものと、「生活」、「史譚」・「地誌」・「公民」、「女子」が「主人公」といった教材が素材とするものの分野や領域によるものとである。これらは、前者が精神の陶冶、感情の醇化の目的を持ち、後者が3つの分野や領域に関する発見や認識を拡充するねらいを持つと見ることができる。この2分類に従って、論考の考察を行うこととする。なお、厳密に言えば「女子を主人公とする教材」に関する論考は、素材とはいいがたいが、精神性には分類できないので、後者の素材に着目した論考に属するとして、そちらで分析、考察を行うこととした。

(2)「国民精神、民族精神、報国精神」、「人間性、人間味」という精神性に拠る論考の分析

1) 国民精神、民族精神、報国精神などのように精神に培う目的の教材

①「国民精神養成の根本たる神話」岡地君子 pp.1-12

④「民族精神の発露たる伝説教材」川那部保 pp.51-62

⑤「尽忠報国精神の真諦たる軍事的教材」武智正雄 pp.63-78

⑭「祖国愛の涵養を意図せる読方教材」藤原米治 pp.195-210

①「国民精神養成の根本たる神話」(岡地君子)は、題目の「国民精神養成」の文言が随所に見受けられる。それは、例えば「国語教育の目的の一つが国家的精神を涵養し、国民的自覚を促すことにあることは何人も疑はない所であらう。殊に最近に於ける社会情勢及び国際情勢の変動に伴ふ国家的精神の高揚は、国語教育をさうした方向に傾けしめつゝあるやうに見受けられる。」(「第二節神話教材の価値」)とあるように、当時の一定の「国家的精神」の元に国語教育を置くという姿勢が見受けられる。

「一体我国に於て神話が「学」の対象として取扱はれる様になつたのは纔かに明治になつてからのことであるが、西洋に於ては久しい以前から多くの観点と方法とになつて分析され解釈されて来、殊に十九世紀から最近に至るまでの間に神話学は長足の進歩をつけ、新なる視野が次から次へと開けて来たのである。即ち

言語学派 自然象徴学派 人類学派

史学派 宗教民族学派 社会学派

等が相次いで起りこれらの各派に属する学者達はそれぐゝ新な視覚から神話を観察し説明したのである。(各説省略)」

とあるように、一定の学説を視野に入れ、この稿の考察を組み立てようとしている意図が明確に読み取れる。単に「国家的精神」に価値を置くところから発した神話教材論ではなく、それも視野に入れつつ、基盤に学術的な背景を押さえて、神話教材の価値を論じようとしていると見ることができる。

「第三章 小学国語読本に現れたる神話教材」の「第三節」には、この両者の考え方が如実に表されている。「(1)神話教材は神代に思惟された事象をそのまゝ表はした尊い心理的事実である神話を児童に相応しく書かれたものである。随つてこの教材は歴史的要素と童話的要素があつて、一面では史実教材の感を持ち、一面ではお話の世界に遊ぶと云ふ心持を持つものである。(以下、略)」とある一方、「(2)神話に現はれる神々の御神徳に感ぜしめる。」ともある。やや推論を推し進めるならば、これが当時の教育界の標準的な教育方針だと見ることもできるかもしれない。

④「民族精神の発露たる伝説教材」(川那部保)は、「元来児童は所謂お話といふ物を好む、殊に彼等の如き想像憧憬の世界に在る者は空想的神秘的要素をもつものに対しては限り無い興味と喜を感じ味はふのである。そしてその中の感情に浸り、或は刺戟されて児童の純情が延びくと育てられて行くのである。」とあるように、小学校児童の特性を積極的に捉える一方で、伝説教材の価値にふれて、「伝説は寓話等のやうに道徳的意識に統率されて居なくても、やはりそこに教訓の含まれてゐる事は否めない。殊にそれは国民精神を反映してゐると言ふ点に於て見逃すべからざる価値を有するものである」とも述べている。総じて、「国民精神」の方を強調する論調となっている。

⑤「尽忠報国精神の真諦たる軍事的教材」(武智正雄)は、軍事教材の肯定、推奨の論ではあるが、「五 軍事的教材の季節的配列について」や「六 軍事的教材の時代的配列とその考察」、「七 教材の陸海軍別表と、教材の各学年への発展について」の章が設けられているように、実証的な態度により、この種の教材の特性を明らかにしようとする姿勢はうかがわれる。結語として、

「軍事的教材の有する究極の目標は、我が国体の尊厳性を感得せしめ、尽忠報国の精神を涵養すべき、偉大な精神力を養ふにある」とあり、実際の教材性に対して、過剰に軍国的に傾斜した解釈を反映した論となっていることは疑いない。

⑭「祖国愛の涵養を意図せる読方教材」（藤原米治）は、題目の通り、「祖国愛の涵養」に読方教材がどのように寄与するかを論じた考である。時局観と教育観を接続して、次のように述べる。

今や我が文化は世界列強に遜色がない。芳しからざりし過去七十年来の外交史は茲に敢然と清算の秋に到達した。大和民族は如何に世界に働きかくべきか、消極的国策は過去の遺物となった。我等は最も積極的に合理的に世界の檣舞台に主役を演じて、大使命遂行に邁進すべきである。即ち内にありては益々日本精神を発揚し、外に対しては各地各国の真相を確実に究明すると共に、挙国一致誤らざる外交政策を練り、我等の世界指導観を確立せなければならぬ。これこそ日東帝国百年の大計であつて、我が国が「八紘を以て宇となす」の大精神であり、且日本教育の一大根幹をなすものであることを確信する。（第三章 時局より見たる地理的教材の重要性）

ここには、国策イコール教育目標という図式しか見えず、適切かつ実現可能な教育観として受け取ることは困難である。ところが、教育の適切性、実現可能性に関わる記述として、「我を知り他を知るの教育は、凡ゆる教育の部局に行はるべきものである。勿論余はかゝる教育の重要性を、地理教育や読方に於ける地理的郷土的教材にのみ求めやうとする偏見に陥るものではないが、日本地理的教材によつて日本の姿を認識せしめ、外国地理教材によつて外国の真相を究明する点に於て、該教材に拠ることが、教科の性質上最も合理的効果的であることを否むものではない。」として、時局論を離れて、实际的で教育可能な教材観を展開している。このアンバランスがこの当時の整合性の粗い論調として現れているのではないと思われる。

「第五章 教材の分類」では、「一、郷土的風物の印象的教材」と「二、児童生活の印象的教材」、「三、地理的教材と見做すもの」の三点から巻一から巻十までの計 89 編の分類を行っている。これを見ると、先入観や偏見で教材を捉えている形跡はうかがわれない。丁寧な読み方教材の類型抽出の作業の成果が認められる。「第六章 題材から見た分類」においては、さらにこれらをまた下位分類している。「一、郷土的風物の印象教材に於ては」、「1 動物に関するもの」、「2 植物に関するもの」、「3 自然界に関するもの」、「4 風景を題材としたもの」に細分類を行っているし、「二、児童生活の印象的教材に於ては」では、「1 動物に関するもの」、「2 児童の遊びに類するもの」、「3 特に田園的なもの」、「4 郷土的年中行事に類するもの」のようにさらなる類型を見いだしている。この作業からは、教材の国策的に強引な使用法はうかがわれず、児童と教材との距離や親和性をとらえているように見受けられる。このミスマッチ的な論調もまた当時の教育界の現状を表す象徴的な姿と見ることができよう。

○総括

国民精神、民族精神、報国精神などのように精神に培う目的の教材においては、文字通りに受け取れば、この目的性に応じて、精神を注入するなり、精神の形成に強く働きかけることがねらわれることになる。だが、4 編の論考を分析すると、いわゆる国家的な精神の育成を目指してはいるものの、単純にそれをスローガンのように受け付けようとするものとは見受けられない。精神の育成自体についても強弱が認められ、ほとんどその色のないものから、かなり前面

に押し出したものまで幅広く論が行われている。それを時局観が作用したと考えることは自然なことであるが、一方、児童の実態、児童の教材への関心、児童と教材との距離感など、すべての論考が児童の教材を受け止める素地を前提としていることがわかるし、その前提も調査的に実態把握が行われた証左として提示されている。一種の科学的方法が採られていることが認められる。そのうえで、「サクラ読本」の多くの教材の類型を見いだして、それを指導に反映させようとする姿勢を打ち出している。実践の成果の提示がないので、額面通りの指導が行われたかどうかは把握できないが、当時の研究水準として、一定の科学的態度で臨んで論考ごとの結論を導いていることが指摘できる。

2) 人間性、人間味を養う目的の教材

②「人間性涵養の慈母たる童話寓話教材」加藤綾子 pp.13-26

⑥「人間味を培う一契機としての「わらひ」の教材」小川忠夫 pp.79-92

②「人間性涵養の慈母たる童話寓話教材」(加藤綾子)は、「童話寓話」のように2種類のジャンルを合わせているが、それぞれについて定義、価値、目的を論じ分けている。童話や寓話と児童との関係に主眼を置いた論考となっており、時勢、時局を反映した記述はほとんど見られない。同論考では、前半において、童話、寓話に分類して意義などの基礎論的な論述を行っているが、後半は、ほぼ「童話」に絞って論じている。

「童話」の意義はかなり積極的に打ち出されている。「童話は児童の読物界の王者である興趣に富む点に於て形式の多様な点に於て、尚又児童の心理に適する点に於て他の如何なる読物よりも優れている。童話は超自然的靈物を中心とした若しくはそれが話中に出現する物語である。超自然的靈物といふのは、魔術咒文を駆使し言葉石薬草の魔力を解しその力によつて永遠の若さと優れた美と大なる富を保有するものをいふ。」として、児童の童話の親近性、超自然性のもつ永遠性や美などに大きな価値を見出している。

一方、「寓話」については、道徳、教訓の教授のための道具的位置づけを明確にしている。「寓話は生物若しくは無生物を假用して道徳を説く物語である。＜中略＞すべて寓話は恭順が本体であつて物語は世人の耳に入り易からしめる方便物に過ぎぬ。由来訓言は四角四面で無味乾燥であるからそれをそのまゝの形で伝へようとしても到底児童の注意と興味を惹くことは不可能である。而して注意を起させなといふことは即ち説話が「その人のもの」となるまで消化されぬ事を意味する。寓話は要するに教訓が第一義で興味は第二義以下のものである。」として、寓話の持つ価値及び教材性については手厳しく断じている。まさしく「方便物に過ぎぬ」という評語が道具的な教材であることを的確に言い表しているといえる。

「第四章 新読本に現れたる童話寓話教材に就て」の「第二節 童話教材の価値」では、その価値について、六点から論述する。「第一悦びを与へることである」、「第二文学的趣味」、「第三に道徳心」、「第四に国民性情の陶冶」、「第五に想像力」、「第六に読む態度の確立」としている。ほとんどにおいて児童が童話教材に接することにおいて現れる価値を捉えている。本論考で唯一時勢、時局的な言及として、「第四に国民性情の陶冶」の項が設けられ、「日本在来の童話はグリムやアンデルセンやアラビアンナイト等西洋のものとはちがひ数百年数千年間言い伝へ語り伝へられたものだけあつて、国民性の篩にかけられ物語の一つくに国民感情が漲つてゐる。＜中

略>現時叫ばれてゐるところの日本精神の涵養も国民性情の陶冶も幼時に於ては日本式の童話をもつてするが最も賢明な道である喜びの糧として与へて行くうちに自づとさうしたものが基礎づけられて行くのである。」と述べられていて、いわゆる時勢、時局のバイアスが大きくかかった形となっているが、それはこの箇所だけである。

「同章 第三節 童話寓話の形式」では、「実際指導に当つて大切なのは童話の形式研究である」として、形式の類型にまで踏み込んで指導観を構築している。以下、該当部分を引用する。

「桃太郎」の如き変化の多い童話にあつては、全体としての形式はあまり顕著でない様に見えるが、それにしても少年犬猿雉といふやうな弱小なものが強大な鬼と対抗して勝利を得る所に見逃すべからざる形式があつて、此の点に於て「兎と亀」「獅子と鼠」と同じ形式を持つものと思ふ。即ち何れも「小と大」「遅いものと速いもの」「弱と強」との対立であり、しかも小、弱、遅が意外にも勝ち若しくは偉大なる働きをするといふのである。猿と蟹、舌切雀も同様の対立と考へられる。＜中略＞

右のような大小の対立といふ形式に並んで著しい形式は反復の形式である。桃太郎の犬猿雉が三遍も同じ様に出てくる所にその反復の形式があり、猿と蟹の蜂栗臼がそれであり、柿の種を蒔いて「早く芽を出せ」「早く木になれ」「早く実がなれ」も亦この反復の形式の利用である。

又かうした反復の対立から成立してゐるものがある。「舌切雀」や「花咲爺」や「こぶ取」やイソツプの「金のをの」がそれである。同じ行動の反復が一方では成功し一方では失敗する所に変化が求められてある。さうしてこの対立反復も「瘤取」や「金のをの」では前後対立であり「花咲爺」は交互対立となつて形式が一層複雑である。

かういふ対立的な反復に対して、更に循環的な反復がある。「鼠の嫁入」がそれである。一番偉い人といふのが鼠から太陽雲風壁鼠と一巡して元へもどる。

童話教材の形式について、きわめて精緻な類型化を行っている。この形式に着目した類型化の教材としての意味は、「在来我が国国語教育に於て童話を取扱ふ場合多くはその童話の持つ意義を偏重して殆んどその形式の重要性を知らなかつた。然し元来童話の類は幼童にも少年にも語られそれ等が年齢の相違にもかゝらず興味を持ち得るやうにできてゐる。即ち幼童は童話の形式がもたらす興味で満足し、年齢の進んだ子供はその内容的な意義や教訓を発見する。更に進んでは一層深い处世観や人生観まで感得する。」とされており、発達段階に応じた教材価値の位置づけまで明確にしている。

pp.16-17に「新読本」の「物語教材」の排列表が示されている。巻7までの物語教材を童話、寓話、伝説、神話、史譚の5つに分類するが、童話・寓話教材は巻3までしか登場しない。ちなみに「神話教材」7編は、①「国民精神養成の根本たる神話」で対象となっている教材7編と合致している。本書が同校教員全員の徹底した合議により成ったことの証左である。

⑥「人間味を培う一契機としての「わらひ」の教材」(小川忠夫)は、中学年以降に現れる「「わらひを意図した教材」の考察を行っている。定義として、「其の文章を読むことにより、(一)文章の論理的発展に矛盾を、(二)事実関係に於ける抽象的思惟と実際的事実、即ち概念と実態との排離を、(三)非常識的、非社会的言動を発見せしめ、その矛盾、その反予期的事実、その

不調和の故に、其処に優越の感情を、滑稽の感情を起さしむるものとする」としている。概念的な記述ではあるが、要は、児童の日常的な認識を裏切る事実の提示に滑稽味を感じるということである。教材として、「舟の上とたゞみの上」(巻五)、「笑話」(巻六)、「笑話」(巻七)、「コロンブスの卵」(巻八)、「ひざ栗毛」(巻九)の5編が挙げられている。「舟の上とたゞみの上」(巻五)から「コロンブスの卵」(巻八)までの4編を「理知に訴へるもの」とし、「ひざ栗毛」(巻九)のみを「情感に訴へるもの」とし、2分類している。なお、この「ひざ栗毛」(巻九)については、「これは編纂方針の「日本文学中の名篇を紹介する云々」を具体的に表示したものと解したい」とし、高く評価している。「教材の一般的指導要諦」として、「1、「わらひ」の教材は、自分一人で読み味つて見て、思はずフハンと吹き出すところに面白味の体得がある」、「2、「指導は何処までも指導でなければならぬ」、「可笑味を真に体得するには混惑を混惑として明瞭にし、闡明しなければならぬ」、「3、指導に於いて、可笑味の直観と可笑味の自證といふことに留意せねばならぬ」として、ある程度の自由度と指導の必要性を合わせて述べている。この論考においては、時勢、時局的な記述はなく、あくまで「わらひ」の豊かな体験を重視している。

○総括

「人間味」「人間性」を養う教材に関する論考2編は、テーマ的に時勢、時局の影響が少なく、それぞれが類型としてとらえた教材の文学的本質、児童における意義を論じている。読むことによる「豊かさ」の獲得が主眼となっているといえることができる。本書全体における位置づけとしても、単に当該分野の主観的な記述に陥るのではなく、研究の背景をふまえた記述を心掛けており、一定の実証性を持っていると解することができる。

(3)「生活」「史譚」「地誌」「公民」「理科」といった素材の分野・領域に拠る論考の分析

1) 生活に根差した教材

⑧「新読本に現れたる生活教材」室華子 pp.109-120

⑨「生活教材に関する一考察」兒玉ます pp.121-130

⑩「生活文に見る観照態度」高井政市 pp.131-138

⑧「新読本に現れたる生活教材」(室華子)は、軍事教材に関する記述以外は、児童と生活との関係で生活教材が成立していることを論じている。巻十巻まで72編見られるとし、巻別に簡単な説明を加えている。「分類」として、「家庭生活」、「學校生活」、「科學的生活」、「道德的(生活)」、「国民公民的(生活)」、「自然観照生活」に分類している。この中で「家庭生活」はさらに「遊戲を主としたもの」、「家庭愛の現れたもの」、「動物愛の現れたもの」、「紀行」、「家庭作業」の5つの下位分類が示されている。中には「横濱港」(巻七)のように本來說明的文章に分類すべきものも、児童の生活的な視点からとらえているとして、生活教材に分類しているし、童話寓話教材「かちく山」が生活教材に分類されているなど、見解の相違がみられるところもある。

室は、生活教材の特徴と条件を次のように述べている。

新読本を通覧してみるのに、その編纂に際して「児童本位」といふ事が強く支配されている事が窺われる。即ち子供の生活を文にしたもの、又は子供の生活に則したものを文に

したものが教材となっている事の多いといふことである。(中略)即ち韻文教材は子供の歌ふ事に即し、生活教材は名の通り具体的な日常の生活にたち、その生活を綴り、生活を読み、説話教材は児童のお話の世界にたち、かくして児童は自己の生活を客観視し、又他人の生活を発見する事によつて子供ながらの喜びと興味と更に進んで生活としての意義を発見する事ができるのである。

すべてを「生活」に帰結させようとし過ぎているくらいはあるが、「児童本位」で教材をとらえるという精神は徹底している。

⑨「生活教材に関する一考察」(兒玉ます)は、生活教材と称しつつも、主に童話寓話教材を取り上げて、児童の生活に密着させようとする試みと見ることができる。分類は、上記の室華子論考とほぼ同じである。本稿において特徴的な視点として、「教材に現はれたる人物・環境」がある。単純に性別、氏名を挙げたところから、「家族血族等」について、「家庭・親戚もしくは学校等に限られてゐる」、とか、「父母・兄弟・姉妹が副主人公又は主要人物として役目を果たしている」等の指摘がなされている。やや国家主義的な傾向が窺われる記述として、次のものがある。

現時児童読み物に現はれてゐる童話は、アンデルセン童話・グリム・アラビアンナイト・ギリシャ・フランス・ロシア童話等実に百花繚乱の観があるバタ臭い物や異国情調の豊かなお伽は怪奇の眼を見開かせ好奇の欲求を満足させるには役立つとしても子供の純情を健かに申し日本人らしい性情を育て、行くには我が国在来の童話に優るものはない。桃太郎・浦島にしてもその中には国民の長い伝統、大和民族の血汐が流れてゐる。此の特色ある童話を教育の糧として行く事は甚だ時宜にかなつてゐる。洋臭芬々たる童話界に敢然として日本式標準童話を採用されてゐるのは実に愉快である。

『国体の本義』等の時局の影響を直接的に受けた記述といわざるを得ない。

⑩「生活文に見る観照態度」(高井政市)は、「観照態度」を設定して教材をとらえる。「観照」この概念は普通には美意識の知的側面における特殊の作用を表示するために用ひられてゐる」として、「哲学的と経験心理学的との各立場からそれぞれの意味が附与せられてゐる」とある。かなり観念的な記述ではあるが、要は「美的」な見方の種類に関わる条件を適切に抑えることを提起しているといえる。

2) 社会科的な内容の教材

③「史譚教材の一考察」武住英男 pp.27-50

⑬「小学国語読本に現れたる地誌的教材」宮崎助義 pp.163-194

⑮「小学国語読本の公民的教材」芦田作二 pp.211-234

③「史譚教材の一考察」(武住英男)は、「日本武尊」、「雪舟」、「弟橘媛」などの「歴史事実の説話」を「史譚教材」と称し、その学習のありようについて述べたものである。童寓話、伝説、神話、史譚の分類に従い、五年生児童四十三名の学習の前後による「真偽判別能力調査」を行い、

童寓話から史譚へと学習後の真実と判断する度合いが上昇することを把握している。そして、それは国史の教科書に書いてあることが根拠となっていることを見いだしている。説話であるにもかかわらず、真実性の判断を国史に記述されているものとそうでないものとの基準で行っていることは、いささか強引の感を免れない。国語読本の巻六について、「児童の最も喜び、又理解する程度に於て、英雄、偉人、天才崇拜の念を助長し、以て旺盛なる日本精神を養ひ、忠良なる日本臣民を育てあげることがを意図しているのである」とあり、時勢に傾いた教材観を示していると思えるを得ない。とはいえ、教材の意図を過度に慮るのではなく、児童に対する調査結果を元に論じていることについては、正当な教材研究の方法を採っているとみることができる。

⑬「小学国語読本に現れたる地誌的教材」(宮崎助義)は、自然地理に即した「富士の山」、「東京」、「大川」、社会地誌に即した「横濱港」、「動物園」、地理を活用した「軍艦」、「潜水艦」、「潮干狩り」などが上がっている。中には「キシヤ」、「自動車」、「兵営だより」などのように地誌的なものとの関係物として採録されているものもある。随所に「日本一の名山、興隆日本のシンボル」、「日本の持つ世界的誇り、霧峰富士に萌芽を見た日本地理」などのような過剰な自己評価の表現も見られる。地理が国家主義に密着した例と見ることができよう。

⑮「小学国語読本の公民的教材」(芦田作二)は、次の立場からの考察である。

人格の本質を個人的実在と見る所謂個人主義教育を対蹠の型として、人生の社会的特性を人格の本質的内容とする目安を以て教育を行はうとの社会本位の教育は、教育の実践を高所から計画し、忠実に営もうとするものにとつての永遠の真理である。さもあらばこそ個人的教育の主張の、その旗幟いとも鮮かにして聴く者をして快を覚えしめる底のさけびも、其の実効は、多血的人の一時的興奮を与える一清涼剤に過ぎない。これに反し社会的教育當為は、その理論にも増した重厚さを以て、実践会に君臨している。げに国家社会的内容を以て第一義とする教育機構ほどに、古くて新しい真実なものはあるまい。

具体的に十一編の教材を取り上げ、論じているが、「兵役は我國民にとつては最大の義務の一つである。と共に日本男子の本懐といふべきである。」(第四「ニイサンノ入営」)、「交通道德から更に広く公衆的社会道德まで拡充したい」(巻五「電車」)、「防火思想に関する教材である。」(巻六「火事」)、「僕も兵隊に行きたいといふ切な年限を抱かせ國民の一大義務への憧憬をもたせると共に、女子も亦銃後人としての理解を得せしむべきである。」(巻七「兵営だより」)、「納税精神に関する教材である。」(巻七「五作ぢいさん」)などのように国家主義思想を公民的考え方に密着させる考察である。

○総括

総じて、各執筆者が依拠する先行研究がまちまちであり、概念の使用についても未調整のままとなっている。また「史譚教材」、「地誌的教材」、「公民的教材」のいずれにも時局への傾倒も見られ、かなり強引に国家主義思想への方向付けを行っている。一方、それぞれにおいて、信念ともいふべき理論の尊重がそれぞれの論考の出発点となっていることも見受けられる。

3) 理科的な内容の教材

⑪「理科的教材と科学的精神」堀巖 pp.139-144

⑫「理科的教材に対する私見」砂井源之助 pp.145-162

⑪「理科的教材と科学的精神」（堀巖）は、理科的教材によって科学的精神の育成を図るべきという主張である。

実質科学として役立つためには事柄に対して追究された論理関係が実證的でなければならぬ。即ち論理関係を導き出す為の具として観察を精確にすることが是非必要となつてくるのである。思考方法になれさすこと、観察を正確にすることは自然科学教育の重要な目的とするところである。自然科学を思考するにあたり特に必要な精神作用を科学的精神と云ふならば、その要素は上述の如く論理に徹底すること、実證を重んずることであると云へよう。＜中略＞

新読本の中には理科的教材として取扱はれてゐるものがかかなり見られる。此等の理科的教材は新読本の各教科が、旧読本に比しての特性である活動的で、生活的で、児童の興味と心理の発達に相応じてゐる例にもれずその特徴を完有している。理科的教材は理科的と呼ばれるだけあつて、文学の中に理科的内容を豊富に含んでゐる。それ故これ等の教材は、科学的知識を得るに大いに役立つは勿論であるが、今一步その奥に潜める科学的精神の獲得まで発展させたいと思ふ。

理科的教材による「科学的精神の獲得」という目的は、ある程度まで首肯できるが、理科学習本来の目的との区別が十分でない。「文学」的な表現によってこそ、「科学的精神」を育て得るとする図式的な発想には限界があろう。ただ、「児童の興味と心理の発達に相応じて」という点に直接経験的な理科教育と間接経験を主とする国語科教育との有機的な関係の存在に対する示唆が見られる。

⑫「理解的教材に対する私見」（砂井源之助）は、理科的教材における「文学的」な「表現」の価値を指摘する論考である。

国語読本が低学年に童謡調、童謡、童話等を可成多く採つてゐることは旧読本と比べて一進歩と言へよう。

理解的教材に於ても低学年に於ては童話的に書かれて児童の心理に適合するやうにしてあるおとも肯づける。それであるから、兎角無味乾燥になりやすい理科的教材が、文学的に表現され、内容も文学的価値の高いものとなされてゐて、而も理解的豊さが盛られてゐることは、国語読本の理科的教材の一大進歩と言へよう。

少々進んで擬人的表現による文を以て理解的教材が採用せられてゐることも前述の如く児童の心理によく適合することから考へて適當である。併し此の擬人文は旧読本にもあつた。

次第に進んで説明文の傾向を持ち、随つて理科的術語等も漸く繁く使用され、科学的な色彩に於て一段と進歩してゐることは、一方四年生以後の理科といふ学科との交渉をも考へられる。

「低学年に於て」「無味乾燥になりやすい理科的教材」に「文学的」「表現」を用いることで「児童の心理によく適合する」とする。内容と表現の関係を的確に述べた論考となっているといえる。

○総括

二編の論考は、方向性において全く異なる位置にある。一方は、「読本」において「科学的精神」を養うとし、もう一つは「低学年」において「文学的」「表現」を用いることの意義について評価を行っている。国語学習という特性からすると、後者の立場に賛意を示したくなるが、前者も教科間連携の点から一考すべき点を示しているといえる。

5. 総括・結論・今後の課題

(1)総括

①児童の心理と生活に結びつけられること

生活教材の概念をかなり広く適用していることもあり、児童の心理と生活との関係性に踏み込んでいると見てよい。生活教材とは児童らしい心理のあり方を反映した教材であり、その重視はこの第四期国定国語読本の特徴といえることができる。この点、諸子の指摘通りといえる。

②「文学的色彩が豊か」なこと

翻訳物に対する厳しい批判も出されているが、第三期で試みられた説明的文章の擬人化は後退しているものの、児童に即した内容と記述がより進んでいることは見て取れる。特に⑫「理科的教材に対する私見」は、「低学年」「理科的教材」の効果としてこの「文学的色彩が豊か」なことを上げて、「児童の心理に適合する」と高く評価している。

③「国民文化より取材したものが多いこと

これは、史話、神話教材の大量の採択に反映している。昭和十二年発足の「教育審議会」において示された「国体ノ本義ノ徹底」「国民大衆ノ教育ノ拡充」「国民体位ノ向上」「科学及産業教育ノ振興」のうち、「国体」と「国民大衆」は十分な教材源となっている。とすると、『第四期国定小学国語読本』は使用されていくうちに、後発の政治状況がマッチしていったといえることができる。²⁵⁾

④『國體の本義』の影響が見られること

⑨「生活教材に関する一考察」（兒玉ます）は、生活教材を推しつつも、一方で「洋臭芬々たる童話会に敢然として日本式標準童話を採用」とあり、『國體の本義』の趣旨通りの見解を示している。また⑮「小学国語読本の公民的教材」（芦田作二）も「げに国家社会的内容を以て第一義とする教育機構ほど、古くて新しい真実なものはあるまい」として、個人よりも国家を優先すべきことを説いており、これも『國體の本義』の主張を真にうけたものとなっている。

⑤「知識教材は少なくなっている」こと

この点については、一覧表から見て取れるが詳細についての考察を次回に回したため、本論考に反映させることができなかった。

⑥論述の質

時局的な影響、文部省の教育方針の徹底などの要因によって、一面的な見解や主張が多く見受けられるが、すべての論考が実践者の感覚に照らして得られた教材研究の成果を反映したも

のとなっている点は高く評価される。特に、『第四期国定小学国語読本』全体の教材を見渡して、学年段階を的確に捉えた分類表を示す論考が多く、視野の広さを感じさせる。

(2) 結論

まず『第四期国定小学国語読本』についての理論的な言及と実践現場で行われた教材研究との整合性が抽象と具体という関係で説明ができる点は、一つの研究成果だといえる。もちろん、朱雀第六尋常小學校の充実した研究体制がそれを生み出したとすることができる。

また急速な国家主義思想の教育現場への浸透度については、いくつかの論考に『國體の本義』に支えられた主張が見られることから、一地方の学校における浸透が見られたことが確認できた。ただし、それはあくまで一端の把握に過ぎないので、今後広く事例の収集に努め、検証していく必要がある。

(3) 今後の課題

本稿においては、『讀方教材の類型的展開と其の指導』（京都市朱雀第六尋常小學校）という一文献の検討を通して、昭和十三年当時の国語教育の実践現場に関する一点描を行った。文献を注視するという意味では、一定の成果が挙げられたと考えられるが、本書が「朱櫻研究叢書」と称する連続する研究書の「第二巻」であることから、この叢書を刊行していた京都市朱雀第六尋常小學校の研究の実態について解明する必要がある。これを今後の課題としたい。

引用文献・参考文献

- 1) 飛田隆『国語教育科学史』1933 明治書院、飛田隆『戦後国語教育史』1983 教育出版センター
- 2) 石井庄司『近代国語教育史』教育出版センター 1983（「近代国語教育史」1961 東京教育大学学位請求論文が原本となっている）
- 3) 22) 野地潤家『国語教育個体史研究』1956 光風出版、野地潤家編・解題・解説『国語教育史資料 第1巻 理論・思潮・実践史』1981 東京法令出版、野地潤家編・解題・解説『国語教育史資料 第6巻 年表』1981 東京法令出版
- 4) 飛田多喜雄『国語教育方法論史』1965 明治図書
- 5) 23) 井上敏夫・飛田多喜雄・望月久貴・倉沢栄吉・野地潤家・『近代国語教育論大系 1～15 続巻 1・2 別巻 1・2』1975～1987 光村図書出版
- 6) 滑川道夫編・解題・解説『解説『国語教育史資料 第3巻 運動・論争史』1981 東京法令出版
- 7) 井上敏夫編・解題・解説『国語教育史資料 第2巻 教科書史』1981 東京法令出版
- 8) 増淵恒吉編・解題・解説『国語教育史資料 第5巻 教育課程史』1981 東京法令出版
- 9) 倉沢栄吉編・解題・解説『国語教育史資料 第4巻 評価史』1981 東京法令出版
- 10) 野地潤家『芦田恵之助研究』明治図書 1983
- 11) 野地潤家『綴方教授の理論的基礎 垣内松三先生のばあい』1983 教育出版センター
- 12) 神谷キヨ子『大正期における「読み方教授」の改革：芦田恵之助・秋田喜三郎の「読み方

教授』』 2016 佛教大学学位請求論文

- 13) 文部省『第四期国定小学国語読本』昭和 8 (1933) 年～昭和 16 (1941) 年使用
- 14) 京都市立朱雀第六小学校『讀方教材の類型的展開と其の指導』 1938 非売品
- 15) 古田東朔「井上赳」『国語教育研究大辞典』 1988 国語教育研究所編・明治図書 p53
- 16) 17) 文部省教学局『國體の本義』 1937.3
- 18) 中内敏夫『軍国美談と教科書』 1988 岩波書店
- 19) 佐藤照雄・勝又将雄「第五章 戦時期の国民教育—国民学校の誕生とその教育—」『教科教育百年史』建帛社 1985 pp.171-172
- 20) 木下政久「国定読本」『日本近代教育史事典』 1971 平凡社 p292
- 21) 『日本近代教育史事典』 1971 平凡社吉良侯 pp.256-257
- 24) 国語教育研究所編『国語教育研究大辞典』 1988 明治図書
- 25) 教育審議会「1937 年 12 月に設置された内閣総理大臣の諮問機関で、「教育ノ刷新振興ニ関スル重要事項ヲ調査審議」することを任務とした。国民学校制度の成立、青年学校の義務制化、師範学校の昇格、中等学校令の公布をはじめとする第 2 次世界大戦下の教育改革はこの審議会の答申を基本として実施された。42 年 5 月廃止。」 2016 ブルタニカ国際大百科事典

